

読書（中）感想文

読書感想文なるものは、通常全て読み終えて書くのが極めて常識的かつ自然な流れであるが、今回は途中で書くことにした。しかも同時に2冊の本に対しての感想文となる。良い子は絶対マネしないでね。なぜなら、とても非常識なことであるから。

今回の読書対象

(1) 山田克哉著「真空のからくり」講談社 BLUE BACKS

(2) 渡辺明監修「爽快！3手詰トレーニング200」マイナビ将棋文庫

購入した動機。これもまた不謹慎かつ著・監修者に対して無礼千万。①睡眠導入書、②暇つぶし。関係各位に対しても失礼の極みである。本来書籍の購入動機のあるべき姿は、①教養を高める、②感動を得る、③人生の指針を考える契機。というところが、常識的なところではないだろうか。でもね。大人になると、大酒飲んでも眠れない程強い(悪い)ストレスや、もう全て忘れてしまいたい多くの辛いことや、現実逃避したくなるような強いプレッシャーが沢山あるんですよ。寛大な心を以ってどうぞご理解・ご了承ください。

「真空のからくり」を途中まで読んで、「真空」の中であつても「粒子」と「反粒子」があつて、互いに相殺しあつて「真空」の様に見えるだけであつて、実際の中は「モノ」が沢山蠢いている状況であるらしい。というところまでは理解できた。では、なぜそれが真実なのか、どうやって証明できるのか、それらの根拠は何なのか、が書かれている件に辿り着く前に、いつも意識がなくなる。つまり睡眠状態に陥る。ある意味、動機(目的)達成で良しとするが、読み切った感はないし、それだけ理解して、だからどうなんだと問われても、返す言葉はない。完全なる何も無い状態はあり得ないのではないかと思えたが、定かではない。無いことが有る？無いとは何か。読破には程遠いし、道は長い。

「爽快！3手詰トレーニング200」を途中まで読むでは、ウソである。第1問に辿り着く前の例題(16までである)の手前(序の序)で常に意識不明となる。最近では本を手にする前から「3手詰みの練習しなきゃ」と思った瞬間、もう意識がない。つまり良く眠れる本となつてしまっている。尊敬する棋士の一人渡辺明先生、たいへん失礼しました。先生の監修本が眠くなる内容である。と決して言っているのではないのです。ご理解ください。読むとは読み切るということは、日頃の先生方の棋戦を通して、学ばさせていただいております。1分間に一億と三手読む先生がいらっしゃるようだが、時間をかけても次の一手(将棋ではなく日常業務)が読み切れないし、その正誤すらも分らない。ともあれ、これらはいつ読み終えるのか。枕元には常時待機しているが、それもすらも分らない。

とても眠い夢を見た。とても眠い中の読書中に。もちろん、夢中だ。